

“母校を愛した”竹喬さん（その2）

笠岡地区まちづくり協議会
文化部会・子ども新聞部



昭和四十八年（一九七三年）に職員室としょくいんしつや図書室があつた古い校舎を建てなおして体育館を建てました。次の年に笠岡しょうがつこう小学校ができて、百年になるお祝いをしました。そのころ、竹喬さんは京都に住んでおられましたが、お祝いになりました。ページに青い「まほろしの校門」をかい「百年誌」の題字と「笠岡小学校」のもじ（きんぽんか）文字を金粉で書いて下さいました。次のページに青い「まほろしの校門」をかい「百年誌」の題字と「笠岡小学校」のもじ（きんぽんか）文字を金粉で書いて下さいました。次に「学校の思い出」の作文を見童のみなさんへと書いて送つて下さいました。そのころ学校につとめておられた先生は「チシヤの木がとても好きで帰つた時には必ず見にこられました。いつもにこにこしてやさしい目をしたおじいさんでした。」とも思い出を語つて下さいました。

（五年 佐藤美織 馬越紹末）

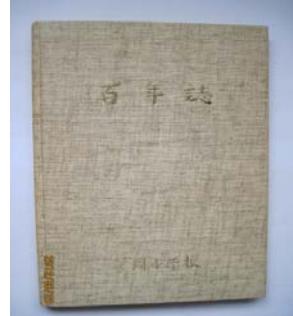
笠岡小の宝物 かさおかしよう たからもの



こうどう ふじさん
講堂にあった富士山(昭和 17 年作)



まぼろしの校門



ひゃくねんしひょうし
百年誌表紙

明治二十八年、私が六才のとき、初めて三岡小学校の校門をくぐつた。其初めての姿の儀が、今尚現存されてゐるといふことは御から遠く放れていた私にとつて、胸に心あたたまる懷かしい思いである。

この事は故郷の人達が、小田原廢趾であるこの文化遺産を、いかに大切にしたかと、この謹じでもある。文化が民族發展の上に更に歴史といふ伝統の厚みのなかに進転しつつあるといふ事は、ありがたいことである。大戦直後、文化遺産を輕視して、日本の伝統文化を破壊しよ)とした一時期があつた。しかしそれが間もなく、徐々に日本人としての自觉に目ざめ、今日では静かな推移をたどつているのである。

母校百年を記念してこの校門にも、更に保存の手が止ばされようとしている。心から祝福したいと思うのである。